「地方に住もう」、二分間プレゼンテーション要旨　　２０１６・０１・２２

大原謙一郎（倉敷）

私は「地方が世界一流の地方になる」ことが日本の国の姿を整えるための基本的要件だと主張してきた。また、それを実現し、実証しようと倉敷で尽力している。

東京は世界水準の首都になった。しかし、それだけで国の姿が整うわけではない。
東京が世界一流の首都であると同時に、地方が世界一流の地方にならなければ国の姿は捻じ曲げられたままで、美しく整わない

しかし、首都周辺には、「東京が世界一流になればそれで良い。地方には、雇用、教育、福祉等の、生活の最低レベルの条件が整っていればそれで良い」という認識がまだあるように思えてならない。そのような認識のままでは、いくら「地方創生」を叫んでも、世界から尊敬される国の姿は出来上がらない。

世界には多くの「メガ地方都市」がある。ニューヨーク、シカゴ、サンフランシスコ、フランクフルト、ミラノ、バルセロナ、ペテルスブルグ、などなど。
それでは、日本の「メガ地方都市」は、これらの都市に引けを取らない魅力と、活力と、景観と、風格を備えているか。名古屋は、大阪は、福岡は、札幌は、どうか

あるいは、世界には、個性と主張を持った「ひとかどの地方」が数多くある。ボストンやニューイングランドの美しい中小都市たち、スタンフォードや西海岸の自由闊達な町々、ヴェネチアやフィレンツェやシエナや宝石のようなイタリアの小都市、コッツウォルズやイギリスの田舎の魅力あふれる村々、コートダジュールの華やかなリゾート、ブルージュやゲントやハイデルベルグやジュネーヴやザルツブルグなどのユニークな都市等、きりがない。
世界では、地方は、尽きせぬ魅力とクリエイションの泉である。
一方、日本の地方はどうか。長崎や松江や金沢や松本や、（そして倉敷も）頑張っている。しかし、孤立無援で苦しい戦いを強いられている、というのが実感だろう。

「世界一流の地方」を目指して働く者のネットワークが組めればと思う。
「世界一流のメガ地方都市を目指す都市」
「世界一流の『ひとかどの地方都市』を目指す都市」
「世界一流の田園景観を目指す田園地帯」
などの、民間を含めたネットワークが、今後の日本の国の姿を整えるために必須と考える。

以上

通巻397号　平成27年6月20日発行（隔月偶数月20日発行）

しゃりばり

CHARIVARI 2015.7 No.397

特　集

多様な働き方

◆NPO法人RSジンジャー〈札幌市〉
◆NPO法人和（なごみ）〈釧路市〉

情報企画部レポート

北海道乳製品ブランド化の成功経験をロシア極東の酪農家と共有する試み

調査部レポート

人口減少社会へ対応するICTやロボット技術を活用した農業の実践

新　連　載

シリーズ・「地方創生」　第１回
新・しゃりばり人（Vol.1）

連載　巻末エッセー（ぷらりしゃらり）

新・シリーズ「地方創生」　第1回

地方創生を受け止める地方のマインド

公益財団法人大原美術館 理事長（岡山県倉敷市）大原謙一郎氏

「地方創生」というスローガンが掲げられてからかなりの時が過ぎ、さまざまな動きが目につくようになった。今後とも紆余曲折はあるだろうが、これが、本当の意味で国の姿を整える活動となって実を結ぶことを期待したいと思う。

しかし、どのような立派な政策でも素地のないところに導入されたら絵に描いた餅にならざるを得ない。「地方創生」も例外ではない。いくら東京が精緻な絵を描いても、それが地方の真の姿を踏まえたものでなければ見当はずれの絵空事に終わってしまう。

そういう意味で、東京が描く「地方創生」の絵図面が、首都の論理の押し付けでなく、「地方の持つ素地」を生かすような柔軟で多様なものになってくれるよう望みたいと思う。

それと同時に、この枠組みを地方のために生かすためには地方の側にもさまざまな工夫と気概が必要だろう。ここでは、地方が「地方創生」に生命を吹き込むために心に留めておくべき気構えというか、マインドについて、思いつくままに記してみたい。

①「地方創生」のコンセプト自体を「地方の視点」から検証しよう

東京の人と話していてしばしば違和感を覚えるのは、多くの首都人が、「地方創生」を、「何もない空疎な『地方』に、何か良いものを創り生み出してあげる」という事業だと心得ているように見えることだ。

しかし、地方は、決して「何もない空疎な地域」ではない。日本全国各地の地方は、それぞれの文化と歴史の伝統の中から多くの美しく価値あるものを生み、多くの事業と独特のライフスタイルを育ててきた。この国は、流氷漂う北の海から、黒潮踊る南の島まで、全国各地に多彩な蓄積を持ったかぐわしい国なのである。

そのことを知らない首都人が「地方創生」の名のもとに思い描く施策が、これらの美しく価値あるものを無視し、場合によっては破壊して、「首都好みの地方」を作り出す結果になる危険は無視できない。

首都で製図されている「地方創生」がそのようなものにならないように、我等は地方の視点でこれを検証し、地方の歴史や文化やライフスタイルと調和した、正しい意味での「地方創生」が実現するよう、積極的に声を上げて行きたい。

②日本の国をクリエイトしてきたのは地方だということを思い出そう

地方が生み育ててきたのは、美しく価値ある歴史と文化の蓄積や、独特のライフスタイルだけではない。地方は、さまざまな技術や事業やビジネスモデルをクリエイトしてきた。

私は美術館の経営者だが、日本で初めて創生した私立西洋美術館は倉敷に生まれ育った大原美術館だった。今は東京にあるブリヂストン美術館は久留米の事業家が、出

光美術館は門司の事業家が生み出したものである。国立西洋美術館もその基礎は神戸の事業家のコレクションだった。

美術館だけではない。私はクラレ（元倉敷レイヨン）という個性ある化学会社の出身だが、これは倉敷で生まれ育った会社である。ライバルの東レの発祥の地は滋賀、帝人は米沢である。全て、東京ではなく、地方がクリエイトした事業である。

地方が新しい事業や技術や美術館をクリエイトする力を失ったら、日本は魅力も活力もない退屈な国になってしまう。地方が、この国のクリエイションのエンジンとしての気概とエネルギーを取り戻して初めて、真の地方創生は成るのである。

③「地方分権」とは「国の行く末を地方が決める」ことだと主張しよう

多くの首都人や首都メディアは、「地方分権の時代だから地方のことは地方で考えて決めればよい」と言う。しかし、それは「地方自治」であって、「地方分権」ではない。

今、国の未来を決める議論と決断は、首都人だけで行われている。その際意見を聞かれるのは、おおむね首都周辺の人たちばかりである。地方の論理と主張は顧みられることがない。これでは正しい判断はできない。

以前この雑誌で、ロシア極東との医療交流の記事を読んだことがあった。日本の中でロシア極東との距離感が一番近いのが北海道であることは間違いない。同様に、北東アジアの息吹を一番身近に感じているのは九州や山陰、北陸の人たちだろう。

にもかかわらず、ロシアや北東アジアに対する国の方針に北海道や九州や山陰、北陸の感覚が反映されているとは思えない。

国の方針は、書類とデータは豊富にあるが身近に息吹を感じることのない霞が関や永田町で決められている。外交だけではない。経済も税も福祉も教育も皆そうである。これがどんなに多くの錯誤と失政を生んでいるか、首都人は気付いていない。

④地方から知恵を出し、声を上げよう

今年の憲法記念日、私の地元の山陽新聞は「『地方のかたち』にも目を」と題する社説を掲げた。「憲法が規定するのは国のかたちそのものである」というのが基本認識だった。

その中で、例えば首都のメディアが口を揃えて主張する人口割一辺倒の「一票の格差論」について、「人口の少ない地方の声が国政に届きにくくなる」という危惧が表明された。そして、「人口を基本とし、行政区画、地勢等を総合的に勘案して選挙区を決める」という自民党案や、人口に関係なく各州に二議席が配分されるアメリカ上院の選挙制度を参考にした「参議院に地方代表的性格を持たせる案」などを紹介して一定の評価を与えていた。

我等地方の民は、憲法の在り方についても、国の姿についても、選挙制度、外交や安全保障、経済や生活基盤など国政のあらゆる基本的課題について、我等の知恵と感性に基づく「地方の論理と主張」を展開し、主張していきたい。地方が「首都の論理」を受け身になって受け入れるだけであっては、国の勢いは縮んでしまう。

そうしてはじめて、地方創生政策も、首都の独りよがりでなく、真に全国の全国民のためになる善き政策となることができるだろう。

大原 謙一郎 氏
（おおはら・けんいちろう）

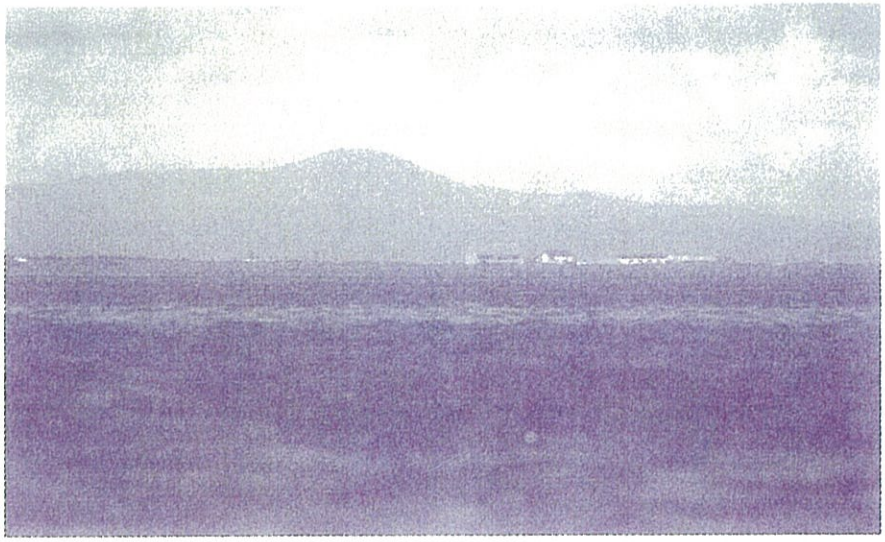
1940年 兵庫県神戸市生まれ。
'63年 東京大学経済学部卒業。
68年 エール大学大学院経済学部博士課程修了。クラレ株式会社副社長、中国銀行副頭取を歴任後、91年から、ほか倉敷中央病院理事長、倉敷商工会議所会頭、岡山県教育委員等を兼務。

ISBN978-4-903838-57-1
9784903838571

風の風景

三浦綾子の舞台を旅する㉕

写真・文　石井一弘（写真家）



KAZUHIRO ISHII

『石の森』

主人公・三木早苗は札幌に住む十九歳の短大生。喫茶店で不思議な雰囲気を持った素敵な女性を見かける。その人、桐井奈津子は実は早苗の腹違いの姉なのだが、それが最後の方で分かるまで、推理小説のように仕立てられている。この小説のテーマは〝孤独〟、家族でさえお互いの心の底はわからず戸惑い、そして悩む。

姉妹の父親は、当時婚約していたが自身の肺結核で結婚できなくなった。婚約者はすでに身ごもっていて奈津子を産む。里子に出されたわが子に会いたくて出かけた根室の納沙布岬近くでトラックに轢かれ記憶を失い下半身麻痺となってしまう。そんな奈津子の母を、自分は結婚して早苗という娘がいる父親は、二十年近くたった今でも、折を見つけて尾岱沼の家に訪ね見舞っているのだ。

早苗はまだ寒い五月の野付半島を旅し、死にそうになる。姉妹のテレパシーか、奈津子が追いかけていき救う。これらの場所の設定が私にとっては因縁を感じ面白い。早苗と奈津子は札幌へ帰る途中、標茶町虹別で大きな虹を見る。この本の解説で、「旧約聖書では、虹は神の存在のしるしなのだ」とある。

私は学生時代からのライフワークで根室・納沙布岬の周辺を撮りに何度も虹別を通っているのだが、いまだ虹を見たことがない。写真は尾岱沼から見た野付半島と、後方、北方領土の国後島である。

しゃりばり

CHARIVARI とは

CHARIVARIとは、中世から19世紀までのヨーロッパで広汎に認められた民族的現象の一つである。「どんちゃん騒ぎ」とか「なべかまセレナータ」といった訳語があてられている。

平成27年6月20日発行
発行・制作／（一社）北海道総合研究調査会（略称:HIT）
〒060-0004 札幌市中央区北4条西6丁目1　毎日札幌会館3階
☎011-222-3669 FAX011-222-4105
E-MAIL（HIT）:info@hit-north.or.jp
（しゃりばり）:charivari@hit-north.or.jp
HP　（HIT）:http://www.hit-north.or.jp/
（しゃりばり）:http://www.hit-north.or.jp/charivari/
©Hokkaido Intellect Tank 2007
掲載記事・写真等の無断転載を禁じます。
発行人／五十嵐智嘉子
編集人／五十嵐智嘉子
印刷／三塚印刷（株）

しゃりばり　第397号　平成27年6月20日発行（隔月偶数月20日発行）
（一社）北海道総合研究調査会　〒060-0004　札幌市中央区北4条西6丁目1　毎日札幌会館　電話011-222-3669